

代表理事だより

2021年2月号

「想定外はなぜ起きるのか？」

私事になって誠に恐縮ですが、1月10日の朝、急な呼吸困難に襲われ、救急車で市民病院に搬送されました。医師の適切な手当てで、幸い、12日間の入院後退院し、2月1日現在、自宅療養中です。持病を持っているのに思いもかけない事態となったのは、偏に、“過信”と“油断”でした。

同じような内容のことを別の場面でも使っていたな？と思いながら振り返ってみますと、昨年（令和2年）の75th 土木学会年次講演会（9月に名工大で開かれる予定だった）において表題の“想定外はなぜ起きるのか？”について研究発表する予定だった時のPPTを見直してみますと、“かつて経験したことのないような災害”が起きるのは、“過信”とそれに由来する“油断”によるところが大きい、というのがありました。併せて、異論もあることともいますが、“想定外”という言葉をやたらに使うべきではない、と主張させて戴きました。ついでに、想定外を避けるための考え方として、“事後対応から事前対応（予防保全）へ”ということも強調させて戴きました。ただ、これを成功させるためには、コスト・ベネフィット分析が不可欠です。

話が飛躍したついでに、かなり無理やりですが、日頃考えていたことにつなげてみたいと思います。話は、“ワガコト化”です。過去、環境省の戦略研究 S4 & S8 に関わっていたころ、ある成果報告会の折に、環境ジャーナリストの枝廣淳子氏が地球環境問題の大事なことの一つは、どう、“ワガコト化”するか？というところにある、という意味のことを言われたことがあります。グローバルな視点で考えて大事なことを第一人称で語る、あるいは、行動することをワガコト化する、と呼んでいるようです。このことは、実は、言うのはやさしいのですが、実行するのは結構困難を伴います。

このことは、病気にも自然災害にも共通していて、他人の災いを“自分のこととして考える”ということは、自分自身がそういう事態に遭遇して初めてできることだと実感出来るものではないか？という思いに至りました。ただ、もちろん、それだけでは寂しいことですから、2020年10月の「代表理事だより」にも書きましたように、“利他の精神”をどう涵養していくかが今こそ問われているという思いに駆られます。

“窓越しに 春の息吹が 訪える

枯れ木に小鳥 佇んでおり”

（2012年2月1日）